

ART BRUT JAPONAIS

アール・ブリュット・ジャポネ展

ニューズレター

URL:<http://www.art-brut.jp>



2010年3月、新しい日本文化が世界に発信されるその時に向け、1,000点近くの作品たちが国内の倉庫で出番を待っています。パリ市立アル・サン・ピエール美術館(Halle Saint Pierre)での展覧会という大きなこの出来事のきっかけは、2006年～2008年の3カ年に渡って行われた、アール・ブリュット・コレクション(Collection de l'Art Brut)とボーダレス・アート・ミュージアムNO-MAとの連携事業に遡ります。この事業の一環として開催された、アール・ブリュット・コレクションでの日本人作家12人による「JAPON(ジャポネ展)」は、当初半年間の開催予定を1年以上も会期を延長するほど盛況で、各地から多くの観客が訪れました。その観客の一人に、パリ市立アル・サン・ピエール美術館のマルティヌ館長がいらっしゃいました。ジャポネ展を観て、日本人作家の作品の素晴らしさに魅了されたマルティヌ館長からの要請で、今回の展覧会開催が決まったのです。さらに彼女は、多くの作家による大規模な展覧会を希望されました。そのため2009年5月に来日し、全国から滋賀県に集められた作品に目を通し、ご自身で作家と作品を選ばれました。熱心に作品を選定しながらも、彼女はどんどん展覧会のイメージを固めているようでした。その後、展覧会名は「ART BRUT JAPONAIS(アール・ブリュット・ジャポネ展)」に決定しました。タイトルが確定したことでさらにその存在を確かなものとしたこの出来事は、開催に向けて着実に動き始めました。今回の展覧会は、作家本人の権利を守ることについて、私たちの認識を大きく変えるきっかけともなっています。パリ市立アル・サン・ピエール美術館から、「出展作家との契約を確実なものにしたい」と言われ、その対応方法について弁護士に相談したところ、契約内容を理解、判断することが困難な作家には成年後見人が必要ということが示されました。このことから、各作家の下を訪れ、展覧会の概要を説明し出展の同意を求めるとともに、成年後見制度の利用が必要な作家については、制度の利用についても理解を求めました。制度の浸透がまだまだ浅いこと、現在の生活において利用していなくても困っていないことから、その話に困惑するご家族も少なくありませんでした。しかし、本人の権利を守るためということで、今回の展覧会をきっかけにと手続きを進めているご家族や支援者も多くいらっしゃいます。2009年9月、出展される作品たちは、美術品を扱う専門業者の手により、丁寧に、定温定湿倉庫へと運ばれました。人がそれなりの扱いをうけると、それなりの振る舞いになるのと同様、作品たちも今まで以上に美術品としての様相をまとったようでした。倉庫内で作品たちは慎重にサイズを計測され、プロのカメラマンに格好よく撮影され、美術スタッフによりコンディショニングについて細かいチェックを受けました。そして一連のチェックが終わった今、パリまでの10,000kmの道のりを耐え得るよう厳重に包まれて、その出来事が始まるのをただ静かに倉庫の中で待っています。周囲の人から地域の人、国内の人とその範囲を広げ、そして、とうとう2010年3月、パリにその舞台が広がります。パリから世界に発信された後、どんなことが起きるのか、少しの不安と大きな期待。そんな出来事の主役である作家たちと、この出来事に関係する人たちが、それぞれの立場でその瞬間が訪れるのを待っている様子を紙面いっぱいに紹介します。



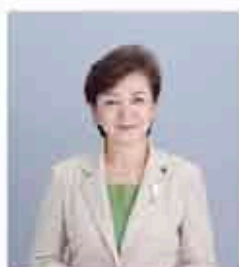
パリ市立アル・サン・ピエール美術館

1868年に建設され19世紀の金属建築の美しいサンプルの一つとして知られる市場を、1986年に美術館に変更、オープンしたパリ市立の美術館。「芸術の都パリ」の中でもとりわけさまざまなアーティストが集まることで知られるモンマルトルの丘の麓に位置する。現代のポップ・アート、ワイルド・アート、アウトサイダー・アート、奇抜なアートを積極的に取り上げ、美術界に常に問題提起している。

パリ市立アルサンピエール美術館のホームページは <http://www.hallesaintpierre.org/>

アール・ブリュットと 滋賀県の半世紀

滋賀県知事 嘉田由紀子



2010年3月より日本の障害のある人の芸術作品展「アール・ブリュット・ジャポネ展」が、芸術の都、フランス・パリという国際舞台で開催されます。会場はモンマルトルの丘の麓に位置するパリ市立アル・サン・ピエール美術館。現代のポップアートやアウトサイダーアートなどを積極的に取り上げ、美術界に常に問題提起している美術館です。今回、アル・サン・ピエール美術館からの打診により、全国20都道府県から約60人の作家が出演する大規模な展覧会が実現することになりました。

昨今、障害のある人の芸術は「アウトサイダー・アート」や「アール・ブリュット」と称され、国内外から注目されています。滋賀県は早くから障害のある人の表現や芸術性に注目をし、全国の実験場として取り組んできた50年近くにわたる歴史があります。その出発は戦後間もない頃に糸賀一雄氏らによって開設された福祉施設「近江学園」において、施設内作業である菓業の合間に障害のある人たちが自由につくった造形作品に遡ります。その後、1980年より滋賀県の施設職員が中心となり取り組んだ「土と色展」は、障害のある人の表現やその世界を、多くの人に伝えました。2000年以降は現代アーティストとのコラボレーション展なども開催され、障害のある人の美術はインサイダー・アートと対等の価値があると、社会的にも認められるようになったと言えます。

そして2004年には滋賀県近江八幡市に国内初の専門美術館である「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」が開設されました。これまで現代アートなどとボーダレスな展覧会を様々な企画してきましたが、昨年は「アール・ブリュット・コレクション」(スイス・ローザンヌ)との連携企画を行い来場者は3万人をこえました。このような歴史を有する滋賀県は、日本における「アウトサイダー・アート」の拠点として、そのムーブメントの中心的な役割を期待されており、次の時代への幕開けとなる「アール・ブリュット・ジャポネ展」においても、積極的な役割を果たしてまいります。

「ART BRUT JAPONAIS」の 実りある開催に向けて

アール・ブリュット・ジャポネ展実行委員長
辻哲夫(東京大学教授)

皆様には、まずこれらの作品をご覧いただけたらわかりますが、作品からは、一つ一つの個性が語りかけてくるようです。見終わってからも、また会いたいという気持ちがします。これらの作品は、私たちの心をとらえて離さないのです。一つ一つの作品が、すべての人間が輝くような自由な個性を持っているのだと力強く訴えているように感じます。これらの愛すべき作品が、芸術の都パリに招かれ、海を渡るのです……。快挙だと思いますか。

「ART BRUT JAPONAIS」を通じ、これらの作品が世界の人々の心に感動を沸き起こし、すべての人が支え合い、共に生きる優しい社会を創ろうと語りかけることと確信します。

そして、このようなすてきなことが始まろうとしていることを、今、日本中の皆様に知っていただきたいと願います。

美術記者が見る「アウトサイダーアート」

日本経済新聞社編集局文化部 宝玉正彦

20年以上にわたって美術にかかわる取材をし、記事を書いてきたが、プロ以外の作家を初めて正面から取り上げたのは、ヘンリー・ダーガー(1892~1973年)という米国人だった。少年期までに両親を失い、病院の下働きなどで生活した人で、知的障害と診断されたこともあった。タイプ用紙にして1万5000枚余りの自作の物語と数百枚の絵を残し、今では「アウトサイダーアート」や「アール・ブリュット」を語るには欠かせない人物としてしばしばその名を耳にする。

ダーガーに関心を持ったのは、作品そのものの魅力とはまた別に、物語を書いたり絵を描いたりする姿勢、その生き方にも引かれたからだ。彼は約60年間、創作に携わったにもかかわらず、作品を他人に見せることなく死を迎え、人に知られるようになったのは、没後に大家が遺作を発見してからだったという。物語にせよ、絵にせよ、人に向かって書き、描くものだという思いが強かったから、公表する意志がまるでなかったように見えるダーガーの態度は不思議だった。

何年後かに「アール・ブリュット／交差する魂」展に出合った際にも同じ感じを味わった。この展覧会に出品していた作家たちは、ダーガーのように一人の世界に閉じこもっていない。人とのコミュニケーションの中で暮らし、現に作品も人の目に触れている。その面ではダーガーと異なる。しかし、人に認めさせようとする意志よりは、自らの表現を突き詰めることの方に関心が向いている点は共通するのではないか。だから、自由に考え、自由に手を動かせる。そうした感じは障害者の作品を紹介する様々な図版やパリ市立美術館での展覧会に出品が予定されている作家の作品写真を眺めても伝わってくる。

実は、「アール・ブリュット／交差する魂」展では、これに出品した作家たちと、日ごろ取材しているプロあるいはプロ予備軍の若い世代のアーティストの間に相似形の意識を感じた。どちらも旧来の手法や表現にあまりこだわらない。その代わりに自分にふさわしい表現をつかんでいる。社会の中での立場や美術に対する意図は異なるに違いないが、自由に表現している点では似ている。

そういう目で見ると、ダーガーは自分に閉じこもったのではなく、孤独だったのではなく、物語を書き、絵を描くことによって、「私」という密室の扉を開いていたのではないかと思えてくる。鑑賞してくれる相手のあるなしにかかわらず、言語や絵画にはもともとそういう働きがあるのかもしれない。ダーガーはその作品を人に見せるのに無関心だったか、そういう機会に恵まれなかったにすぎない。が、表現し、造形する喜びとその力を知悉していた。だからその作品が人を惹きつける。

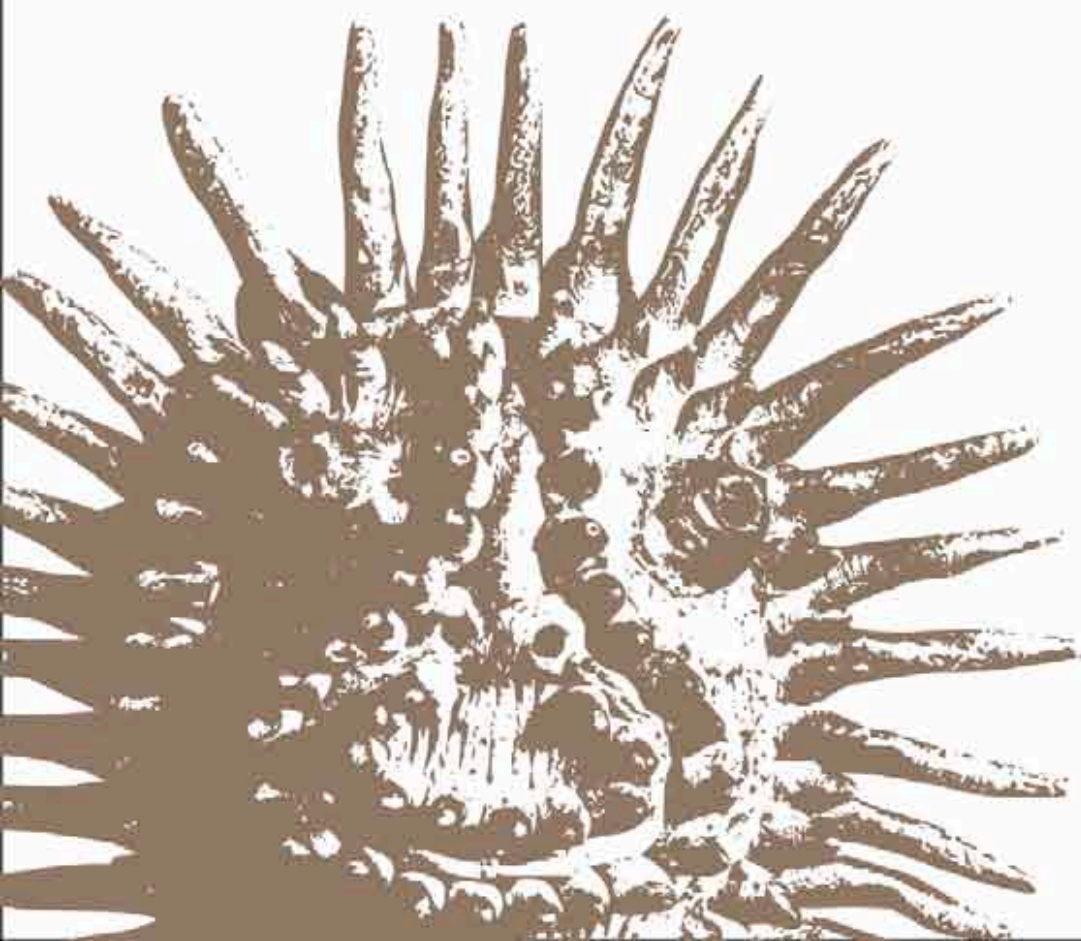
美術が人間と社会にとってどう価値があり、必要なかという問いには多くの人々が答えてきた。そういう専門領域が社会に根づき、知見が蓄積され、価値観が共有されている。が、それがそのままあらゆる種類の「アート」にあてはまるとは限らない。価値そのものが流動し、変化もする。大事なのは「アウトサイダーアート」と様々な美術の「対話」あるいは「交流」によって、それぞれの社会的なあり方をたえず問い直すことではないか。そのためには様々な試みが行われ、その良さに触れる機会が増えればと思う。

ボーダレス・ アートミュージアム NO-MA

滋賀県近江八幡に昭和初期の町屋を生かしつつ改築し、2004年6月に開館した滋賀県社会福祉事業団が運営する全国でも例のない公的ミュージアム。ここでは、障害のある人の表現活動を一般のアーティストの作品と並列に観せることでさまざまなボーダーを超えていく「人の表現力」を主なテーマに展開している。これまでにワタリウム美術館や北海道立旭川美術館など国内の美術館はもとより、アール・ブリュット・コレクション(ローザンヌ市)など海外との共同企画も実現させています。

アール・ブリュット・ とは

伝統や流行、教育などに左右されず、自身の内側から湧きあがる衝動のままに表現した芸術。加工されていない生(き)の芸術。英語ではアウトサイダー・アートと称されている。フランスの画家ジャン・デュビュッフェ(Jean Dubuffet 1901-1985)によって考案された言葉である。



私は通常、東京にある国立近代美術館というところで学芸員をしていて、展覧会の企画をしたり、所蔵品となるべき作品を調査・研究して収蔵にこぎつけたり、ここに書くのも面倒な雑事に従事したりしている（一応書いておけば、三番目に分類される仕事の量が一番多いのが実情である）。

そんな私が近江八幡にあるボーダレス・アートミュージアムNO・MA（以下、NOMAと略）で展覧会を企画することになったのは、おそらく、勤務先の美術館で2008年に「現代美術への視点6 エモーションナル・ドローイング」という展覧会を企画し、その中に一私としては作品本位で選んだだけであるが「アウトサイダー」の展覧会で紹介された経歴を持つアーティストの作品を含めたことがあるからだろう。またNOMAをはじめとする国内外のアウトサイダーアートの展示施設について、美術専門誌や文芸誌にレビューめいたものを書いたりしたこともある。

つまり私は自分なりに、具体的には学部生の頃から、いわゆるアウトサイダー・アートなるものに関心を持ってきたわけであるが、そういう立場で、より具体的に、この分野に取り組むというか関わるようになってみていろいろ悩んだことがあるので、この場を借りてそれをちょっとお話ししてみたい。

いくつかあった悩みのうちのひとつが、カタログである。

NOMAは、プロフェッショナルのアーティストとそうでない人の作品を、同じ空間で分けへだてなく展示することをひとつの特徴とするが、展示空間で両者の間に差を作らないことはさほど難しくもない。展覧会制作のプロとして、私は自分にそれくらいの力量はあると認識している。しかしだ。カタログにおける略歴のページにおいて「差」は歴然としてしまうのである。そして展覧会制作のプロとして私はそこで戸惑う。

まず、量が違うのである。そして記述される内容が異なる。もし「カフェ」が展示スペースに入っていたとしても、プロとそうでない者それぞれにとって、意味は違ってくるだろう。

しかし実際のところこのいわば略歴問題は、普通美術館の普通の企画展でも起こりうる。出品歴がたくさんあるベテランとそうでない若手を一緒に展示する場合などがまさにそうだ。だからその意味では、あまり気にする必要はないのかもしれない。

しかし、ことはそう単純ではない。というのも、プロフェッショナルでない場合に、とりわけ学歴について載せない方向でいきたいという申し出があったりするからだ。

理由はわからなくもない。美大や専門学校などを出ていないのであれば、そうした情報は必要ないと考える人もいるかもしれない（それ自体がすでにバリアをつくってしまっているのだけれど）。また最近では個人情報保護の保護に關しての意識も高まっている。

しかしこの「削除」は、略歴ページというものが、作家の「履歴書」や「PR資料」なんかでは決してなく、展覧会の主催者側が（ないしはカタログの編集側・発行側が）責任をもって編集する「歴史資料」であるという基本的スタンスを崩しかねないという可能性を孕んでいる。極論すれば、それは、「展覧会」というシステム自体の変更を迫ることになる。あるいは、展覧会会場という物理的空間では対等に扱っていたものが、カタログにおいては基準が二元化してしまうという意味で、展覧会という存在それ自体が脆弱化する……。

私が今更言うことでもないけれど、「アーティスト」というのは、本当に不思議な存在である。

彼らには表現の自由が許されている（あるいは私たちは彼らを通して、表現の自由があるということを知る）。しかし当然のことながら、彼らはその代償を払わなければならない。たとえば彼らには経済的保証がない。作品の値段（つまり原則的には彼らの収入源）は、受容と供給の間で極めてフレキシブルに決まる。高値をつけた作品がやがて低くなることもある。面白い作品をつくり続けられない限り、「過去の人」となる可能性だってある。また、誤解を受けそうだから一応言っておくが、評価と価格（経済的保証）が一致しないことも受け入れなければならない。いかに作品に意義があろうとも、それが美術マーケットにおいて価値を持たないケースは少なくないのだ。

言い換えれば、彼らは、そうした可能性を充分に理解した上で、表現の世界に飛び込む。彼らは、表現の自由以外には、な一んにも守られていない存在。まさに自由な存在なのだ。

私は、そんな彼らのことが好きである。その上で、遙かなる自由を、さらなる自由を感じさせてくれるものとして、いわゆるアウトサイダーアートの作品を好きになったのである。しかしそこは結構難しい世界であった。その世界と、すでにシステム化された世界を結びつけることが果たしてどこまで正しいか、今の私はよくわからないでいる。

そもそも、プロフェッショナルではない彼らをなんと呼べばよいのだろうか。この原稿も、悩みながら、ごまかしながら、なんとかここまで書き進めてきた。「アーティスト」？今では、そこらへんの歌い手の名称として流通するこの言葉をあてはめるのは気が引ける。狭義のそれだとしても、それこそアートが狭い世界に入ってきてしまっている感が（少なくとも専門家としてはあって）、彼らにはふさわしくない。また、正直こうも思う。「自由」を意識的に引き受けた者を「アーティスト」と呼ぶとするならば、その言葉を使うことはできないと。

では、どうすればよいのか？表現者？作り手？彼らにふさわしい名を、こうやって、既成の言葉の中に探すことそれ自体が間違っているのかもしれない。といって、「アート」という言葉に逃げるのだけはいけない。そう戒めるだけの力を、彼らの作品は持っていて、私はいつだってその前で震えている。



再発見されるアウトサイダーアートの魅力に期待

作家 田口ランディ

パリ市立美術館主催による日本の作家企画展「アール・ブリュット・ジャポネ展」に出展される作品を見た。圧巻だった。今回の作品の最終選出は、パリのアル・サン・ピエール美術館の館長が自ら行なったという。出そろった出展作品を眺めながら、日本人である私の視点と、ヨーロッパ人の視点が明らかに違うことを強く感じ、自分がいかに環境や価値観、意味という枠組みから抜けることができないかを改めて思い知った。

たとえば、文字、特に漢字を作品のモチーフとして使っているアウトサイダーアーティストは多い。それらの作品と向き合うとき、漢字を母国語として使っている私は漢字のもつ「意味」に縛られてしまう。見た瞬間に脳裏に意味が想起される。その意味によってイメージが作られ、漢字そのものの形の美を觀賞することができなくなってしまうのだ。だが、漢字を知らない人たちは、漢字のもつ形の美を見ている。それは美しいパターン、不思議な文様として認識される。このように、外国人の視点を通して日本のアウトサイダーアートが再認識されることは、アウトサイダーアートに関わっている私にとっても新しい体験なのだった。

アウトサイダーアートの最大の魅力は、私たちの思い込みや既成概念をいともたやすく崩してくれるところにある、私はそう思っている。だが、いくら崩されても私は意味という呪縛から逃れきることはできない。生きている限り意味を求めてしまうのだ。日本という環境に暮し、日本の文化を享受し、日本語を使って生きているのだから、その環境のなかで物ごとを意味づけしてしまうのはいたしかたないことだろう。大切なことは「この意味だけがすべてではない」と知ることではないか。

世界には無数の民族が存在し、それぞれの文化をもち、それぞれの価値観や宗教、美意識にしたがって生きている。インターネットの普及によって画期的に情報化が進み、私たちは世界が多様であることは知っている。だが、知っていることと、身体や肌で身をもって感じることは全く違う。現実には自分とは違う考え方や価値観、感覚、異なった行動様式や意味不明の態度の人間と隣あったとき、我々が感じるとまどいや差別、軽蔑や嫌悪といったマイナスとされる感情は、あってはならぬもののように忌み嫌われ、否定される。

だが、違和というものは決して心地よいものではないのだ。違和というのは、ごりごりとした飲み込みがたい突起、いわゆる刺激、どちらかといえば衝撃や嫌悪を伴って体験されるものなのだ。この感覚は決して悪ではない。感情にも感覚にも善悪というものは存在しない。どのような感情、感覚もそれを体験することは素晴らしい。もし、悪があるとするなら、その感情によって引き起こされた行動に、他者がなにかしらの損害を受けることを悪とするのだ。だが、それは行動の結果であり、感情そのものに善も悪もないのである。良い雨、悪い雨がないように、感情もまた自然の一部なのである。

アウトサイダーアートを初めて見た人のなかには、とまどいを感じる人も多い。強い衝撃。違和、自分とは違うもの、理解しがたいものをその作品に感じるからだ。私にはこの違和感がすでに快感なのだが、違和を不快で得体の知れないものと感じる人も多いだろう。特に昨今は誰もが感じるセンチメンタルな叙情をなぞり、それを時代の雰囲気などと呼ぶ甘ったるい写真や、コンセプト重視で意味を説明しただけのような現代アートが幅をきかせている。そうした風潮のなかでカウンターパンチのごとき違和感を突きつけてくるアウトサイダーアートに、私は躍る時代の突破口を見るのである。

私はスイスのローザンヌにあるアール・ブリュットコレクションを訪れ、アール・ブリュット作品を実際にこの目で見てきたが、日本の作家には日本人としての特徴があるように思う。一つはプリミティブな感覚。古代縄文文化のアニミズムと繋がるエネルギーな野生、想像を絶するような大胆なデフォルメ。意識の深層から湧き上がってきたような妄想。私たちが通常は常識や体裁でもって押し殺している潜在意識のイメージが、自在に飛び回り躍動しているのである。野生への回路を見失ってしまった現代人にとって、これらの表現は恐ろしくもあり、また、爽快でもある。

そして、もう一つは「音の感覚」である。日本の作家の作品には聴覚的な感性をより強く感じるのだ。たとえば、自閉症の作家が細かな字や文様を繰り返し書き続ける。いつしかマーカーのインクが少なくなり、自然と画面に濃淡が現われる。その濃淡の文様が私たちになにかを訴えてくるのである。これらの作品は視覚的な体裁をとっているものの、表現されているのは音的な世界なのである。彼らは静謐な世界のなかでなにかしらの音を聴いている。風の音であるかもしれない。雨の音であるかもしれない。音は全方位的に体感される。なにかしらの音が彼らの身体を媒介にして紙の上に漏れ出している。音は自分の身体が発している振動と外からの振動を共鳴させて体験される。たぶん日本人は自然のアトモスファを描くために聴覚を総動員してきた民族なのである。この、聴こえない音に対する超越的な感性は日本人作家の作品に不可思議な陰影を与えており、それがヨーロッパの人たちにとってなんとも魅力的に感じられるのではないかと私は推測している。

日本のアウトサイダーアートが世界へ出ていくことにより、日本の印象もまた大きく変わっていくだろう。欧米文化の洗礼を受けることもなく長年を施設内で過ごしてきた作家たちのなかには、諸外国に多大な影響を与えるであろう「日本的な感性」が息づいているからだ。中途半端に西洋かぶれしてしまった私たちにはわからない日本のアウトサイダーアートの魅力を、パリが再発見してくれることを、確信している。



黒田純光



黒田和彦



黒田一英



青木尊



佐久間祐一



島野公一



細名祐孝



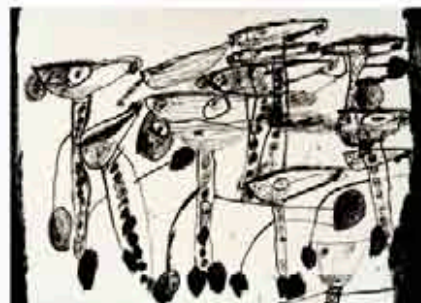
村田清司



長弘史



内山智昭



滋賀健彦



八重樫通代



平岡伸太



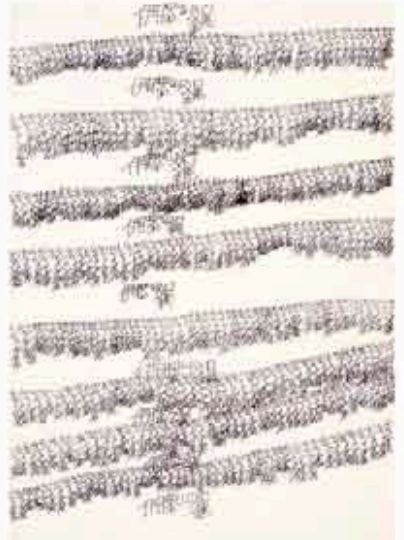
宮間英次郎



蒲生卓也



佐々木翠苗



伊藤時尾



辻角二

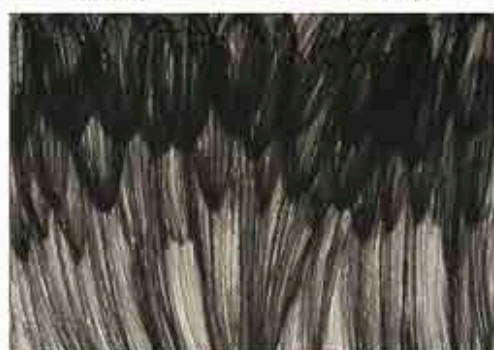


高橋重美



土屋正彦

木本博俊



木村茜



木伏大助



古澤健



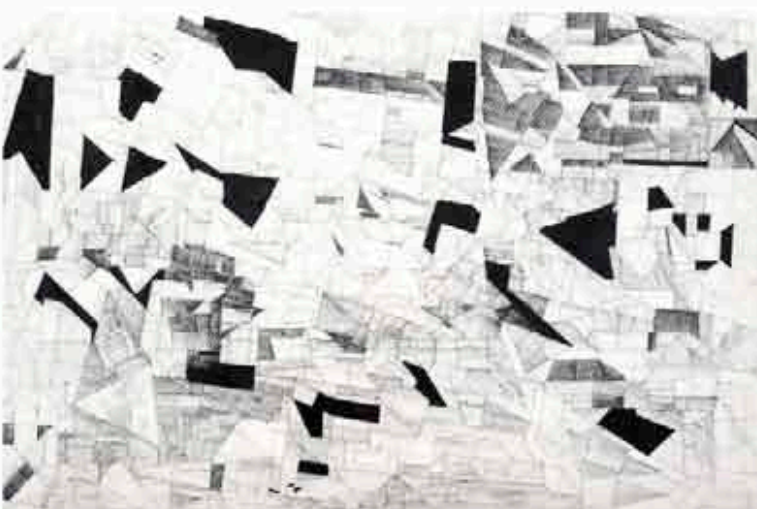
野俣明宏



水谷伸郎



上里浩也



平瀬敬雄



平野信治



森野良夫



伊藤雅彦



今日アール・ブリュットは現代アート・シーンにおいて確実に評価されており、2009年にはアール・ブリュット・コレクションを代表するアーティスト、アロイズの大規模な回顧展が日本で開催されました。そして2010年3月から9月まで、日本のアール・ブリュットやアウトサイダー・アートの全容を紹介する展覧会が、パリ市立アル・サン・ピエール美術館において開催されます。

本展覧会では、約60名のアーティストによるデッサン、絵画作品、および多数の立体作品を含む、約1000点の作品をご紹介します。展示作品には現代アートにお

アル・サン・ピエール美術館館長
マルティヌ・リュカールディ

アール・ブリュット・ジャポネ展 出展作品(予定)



吉川秀昭



飯万里絵



芝田貴子



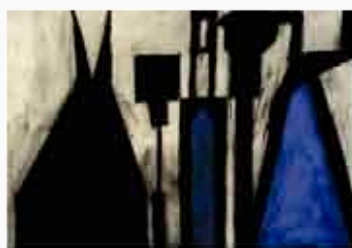
石野光輝



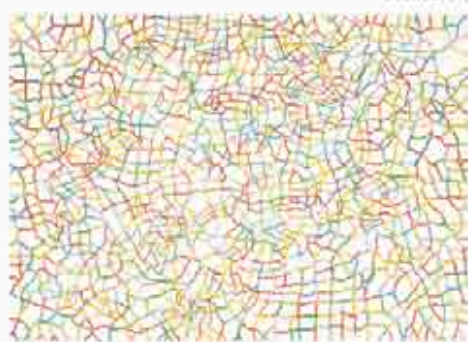
戸来貴博



久保田洋子



河次雄



松本寛康



下田賢宗



曾根裕一



上田志保



本岡秀則



西川智之



松田雄馬



山崎健一



大久保寿



石野敬祐

ART BRUT JAPONAIS

けるアール・ブリュットの<原型的>な作品も含まれるため、アール・ブリュットの普遍的な様相を理解することができるとでしょう。また、特に日本文化に独自の特異な表現にスポットを当てていきます。

日本国外でこのような大規模の展覧会が開催されるのは今回が初めてのことであり、これはフランスおよび日本の学芸員の方々の素晴らしい協力関係によって実現したものです。日本のアール・ブリュットのアーティストの何人かは既にヨーロッパでも紹介されていますが、ごく限られた規模においてのことでした。その意味でも本展覧会は非常に画期的なイベントであり、アール・ブリュットおよびアウトサイダー・アートにおける新しいアーティストと、彼らの素晴らしい作品を知るまたとない機会です。

アル・サン・ピエール美術館にとっても、本展覧会は創造行為の根本的な問題について見直し、アートの根源や境界、変動との関係、そして何よりアーティスト本人とアートとの関係について新たに問い直すよい機会となるでしょう。



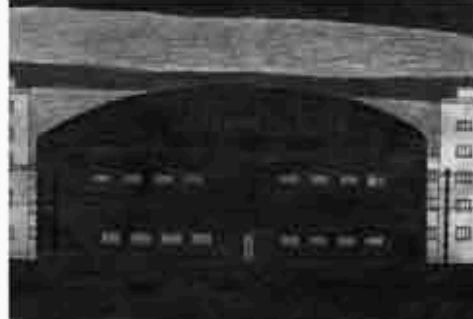
石崎司



西本敏雄



畑中亜未



三橋靖樹



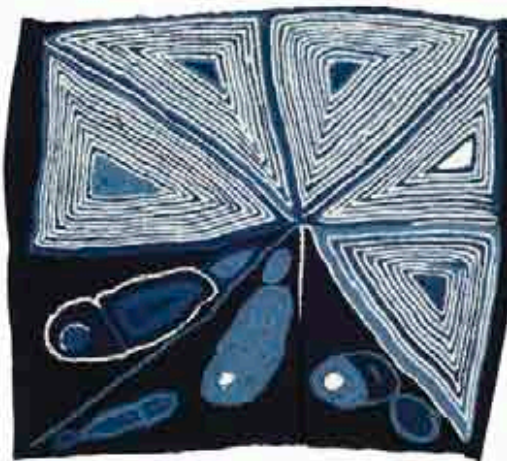
大塚公子



石井春樹



泉屋



萩野トコ



澤田真一



喜舎場啓也



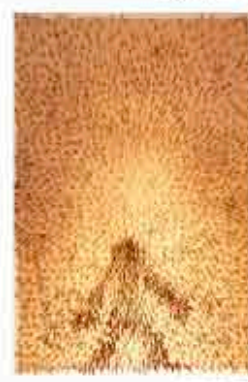
M.K



小幡正雄



城間啓栄



田島征二



加藤種男氏（左）は、アール・ブリュット・ジャポネ展第1回実行委員会の委員長を務める。右は、同展の開催地である東京都現代美術館の正面入り口。背景には、同展のポスターが掲示されている。

二足のわらじ ―AAFと創造都市―

まず、自分が今何をやっているかということを紹介します。「アートツーリズムでいこう アサヒ・アート・フェスティバル2009」というものがあります。これは北海道から沖縄まで全国津々浦々、市民が自発的に創造活動を社会につないでいる仕事をしている、アートNPOのプロジェクトを探してきて、それぞれ自立はしているのだけど、お互いに連携し合っていくという仕掛けを作っているものです。こういうことを開催しているのが一つです。これが評価されて、昨年度芸術選奨文部科学大臣賞というものを頂戴したわけです。フェスティバルをやっている中で我々が強く関心を持っているのは、「アートで地域再生ができないか」ということで、この観点をフェスティバルの中で強く打ち出しているわけです。プロジェクトの一つに「わたらせ渓谷鐵道 現代美術展 ワタラセアートプロジェクト2009」というものがあります。これは若いアーティストが40人ぐらい自発的に渡良瀬のエリアに、群馬県、栃木県、足尾銅山を中心としたエリアですが、わたらせ渓谷鐵道の沿線40キロぐらいの非常に広い範囲に、ある程度ある時期そこに滞在して、いろいろなアート活動をやっていくというものです。今年で4年目を迎え、最初はやりたことをやるということで始まったのですが、やっていくうちに地域のうずもれている資源を発掘していくということにやはり気がつく。今は使われていないけど地域には素晴らしいものがあるということに気づくようになるのです。特に近代の産業遺産というものに、最近大勢の若者やアーティストが着目するようになってきました。そういう中で、もはや今は使われていない近代産業遺産を壊してここに何かを建てるのではなく、これをそのままの形で生かして、何か地域再生のための拠点とすることができないかという大きな計画なので、すぐに回答があるわけではないのですが、そういうことをやっている人たちがいるということです。これが一つの例として、他にも全国で赤レンガの倉庫ですとか、シャッター街化していく商店街の空き店舗とか、廃校とかを一つ一つ発見して来ては、何らかの形で創造的な拠点として変えていくということをやっているわけです。こういう活動を通して、たまたま縁があって横浜市と出会いました。横浜市にも近代遺産があり、最初に話があったのは、銀行だった素晴らしい建物で、これを何とか活用できないかということでスタートしました。ここからスタートして横浜の都市を新たに形成していくという活動に現在深くコミットしておりまして、二足のわらじを履いていることになりました。一つはアサヒビールという民間企業の文化の振興事業。もう一つは自治体がやっている「創造都市」ということに携わっています。創造都市というのは、幅広いアート活動を含むクリエイティブなさまざまな産業や、まちづくりということまでひくくめて新しい都市の形成を図るということをしています。もっとこれを広く取ると地域創造という言い方もできると思います。そうした地域創造を全国的にいろいろなところで進めているわけです。

地域再生にアートの視点を！

最近、特に田舎に行けば行くほどですけれども、地域の疲弊というものが大きな課題だということに気づきます。これは私が言うまでもないことです。そうした地域社会の疲弊、経済的にも社会的にも疲弊しており、たとえば限界集落がものすごくたくさんあるとか、いろいろな面で課題が大きくなってきている。そういうところにこそ我々は「アートが役に立つのだ」と申し上げ「アートで地域の再生を図ってきたい」ということを考えているわけです。アートでなくて、もっと他にやり方があるだろうとも言われます。それはいろいろあるかもしれないけれども、どのようなやり方をするにしても、そこにアートの視点を入れるということが、必ずや地域再生にとってプラスになるという風に我々は考えているということです。それはどうしてかと言うと、今まで疲弊してきた理由は何かだろうかと考えた時に、アートの持つ創造性が何より必要だということが見えてきたのです。わかりやすい例で言うと、現在の経済危機について、経済が疲弊しているから、経済を再生していくためにはとにかく経済活動の中に金をつぎ込めばいいという風に一般的には考えるわけですね。現在、いろいろなところで行われている施策のやり方も、経済再生のためには経済にお金をつぎ込むべきだ、こういう考え方だろうと思うわけです。それは一見もっともなように見えますが、実はシステムそのものに大いに問題があったのではないかと考えています。経済のシステムが崩壊をしてしまっているのに、そこにいくらお金をつぎ込んでもいい結果は生まれないのではないだろうかという疑問を我々としては持っているということです。どのように経済が崩壊したかという、我々が企業にいて、しみじみと日々感じていることは、株主の配当率をいかに高めるか、株式総資産をいかに高めるか、このことに企業が躍起になったということです。そのこと自体は大きな間違いではなかったかもしれないけれども、経済界の周りを見渡すと、ほとんど架空と思えるような投資活動に血道をあげてきた。そうした結果、経済が疲弊してきたのではない、破たんしたのではないのかと思うわけです。そうした時に、新しい経済のシステムというものを作っていくことが必要なのではないかと思うわけで、ここに創造力、クリエイティビティというものが絶対に必要になってくるのだと思っています。もっと生活実感に根ざした経済の新しいシステムはどうしたら作れるだろうかというプロセスに、創造性というものが必要で、それはアートの中にあるのだと考えているので、いろいろなところで実験をしてみているわけです。それなりに面白い結果が出てきています。

文化度の低い人はいない

よく世の中の人には、「私は文化度の低い人間でございます。文化のことはよくわかりません」と言います。それは一見もっともに見えるけれども、まったくの間違いで、文化に明るくない人は世の中にいないという風に考えたほうが良いと思うわけです。と言うのも、今までは文化というものをあまりに狭く解釈すぎて、オペラ、オーケストラ、あるいは美術館の中でだけ鑑賞されるような美術作品、そうしたものが、本当の芸術文化であってそれ以外のものは低級なもの、重要でないものと考えられてきました。だから文化がわからないというのだけれども、日本人として生きてきて、例えば日本食の、刺身もそうですしお寿司なんかもそうですが、そうしたものの善し悪しについて、たいてい人は「本当にこの寿司はいいね」とか「いまいちだね」という判断がつくわけです。それは文化性が高いということです。どうしてそういうことがわかるかというと、もちろん経験値が豊富にあるのが一つです。また、日本の食文化が今世界で非常に注目されている理由は健康の面もあるけど、もう一つ言うと、アートとしての力がものすごく日本の食にはあるのです。一番典型的なのはお寿司、刺身はなんでもないのであるんですけど、「生の魚を単に切っているだけでしょ、上に乗っただけで

しょ」という風に見えるけれども、そんな簡単なものではないということはおみなさんよくご承知の通りで、一見なんでもないように見える事柄の背後に、洗練されたデザイン力と高度の技術が潜んでいる。それをできるだけ生のまま、自然のまま手を加えていないように見せて、でもその背後に技術やデザイン力を隠している。そういうやり方が日本文化の一つの大きな特色なのです。そうしたことは日本人ならすぐわかるというわけで、そういうところを我々自身もっと自信を持って、我々の持っていた文化の長さ、創造力をもう一度発見していく必要があるんじゃないかなと思います。こうした文化の創造性に着目することで初めて経済再生も可能になると思います。

文化か？福祉か？

それでアールブリュットですが、アールブリュットについてはみなさんの方が専門なので、特にこの件について深くコメントできませぬけれど、某県で、オペラ劇場というホールについて議会で議論があって、その時の議論の仕方が、寂しいなと思ったことがありました。そこでは、お金は文化につき込んだほうがいいのか、福祉につき込んだほうがいいのかという議論がされていたわけです。そこでそういう議論がされて、非常に残念だなと思ったわけですが、文化か、福祉かというような切り方がそもそも文化というものをよく理解していない。まさにおっしゃっている通り「文化度低いですね」という話だと思のです。そういった切り分けて議論をしていく二者択一論を我々としてはぜひ克服していく必要があるのではないかと。そしてさまざまな福祉的な課題解決にも実は文化というかアートというか、創造力というものがものすごく深く関与しているし、役に立つわけです。というのは、人間はどんな状況に置かれても、すべて表現に対する強い欲求力がある、特に自分は何者であるかということをやったり表現したいし、そのことを社会的に認知してほしい、社会的に認められなければ人間は生きていけないわけです。そういう意味で、自らを何者であるか社会の中できちんと認知してもらおう手法としてアート表現というものが非常にポジティブに役に立つということです。

アーティストとアート

時々アーティストに、我々の目標について、「アートを地域振興に役立てるんだ」とか、「アートを使って地域振興をやるんだ」とか、「福祉、環境、時には防災にすらアートの観点をを入れて新しいシステムを作るんだ」とか言う、しばしば批判されます。それは「俺たちはそんなことに利用されたくない」ということです。その気持ちは幾分わからなくもないんです。というのは歴史的にみると政治的にアートが利用されたような歴史もあるので、あるいはセンサーシップで表現の自由に対する圧力が加わってきたことがしばしばあったので、そういう面ではアーティストがそういうことに嫌悪感を示す理由はわからなくもないんです。けれども、そういうときに私がいつも切り返しているのは、利用されるくらいで、自分の作品、アート活動が何かにゆがめられたり潰されたりする程度ものなら、最初からそれは大したことはないんだから、それはやめたほうが良いということです。逆に言うとアートというものは功利性がないので、直接何かの役に立つものではないのだけれど、しかし何に関わってはいらないという範囲もない、つまりすべての事柄にアートが関わることを出来るということです。それは福祉の問題であろうが、環境問題であろうが、地域の課題であろうが、何であるかがアートが関わってはいらないという制限がどこにもないの、そういう意味ではいろいろなすべての世の中の出来事にアートは関与することが出来るのです。自らがテーマとすることが出来るそういう便利なところにながら、「私のアート活動が福祉活動に利用されるのは気に入らない」とか「街づくりに使われたくない」とかすぐ言う。そんなアートはたいしたことから「ああそうすか」と言って無視していればいいと私は思っています。

本当の願いを実現するアート

いずれにしても福祉の新しいソフト開発、モデル開発というものにとっても、アートというものが非常に役に立つ。その例を真に見事に示しているのがアールブリュットというものでもあります。それだけではもちろんなくて、例えば高齢者の福祉で老年寄りも含めてすべての人が生きがいを持って、死ぬまで生きがいを持って、自分の存在というものを社会的に認め合いたいというのが本当の願いだと思うのですが、そうした願いを実現していく意味でもアート活動というのが非常に役に立つと私は思っています。その時に最後に一つだけ付け加えるとしたら、さんざんアーティストの愚言を言いつつも、実は残念ながら多くの一般の人、それは障害があるとかないとかに関わらず一般の人は、自己表現の手法という手段を必ずしも持っていないということです。そこがなかなか悩ましい問題で、いい自己表現の手段、手法というものを自ら開発することが普通の人には難しいわけです。そうした時に専門的に高度なそうした手法を持っているアーティストの存在はなかなか魅力的なものです。ここで初めて我々ももう一度アーティストの存在というものを再認識して、彼らに是非寄り添ってきてくれと、我々の世界で一緒に仕事をしようじゃないかと、あなたが自己表現の手段を持たない人たちと一緒に仕事をするということによって、あなた自身の表現力が強くなっていく、同時に我々一般の人間の表現力というものもまた開発される。そういう意味でぜひ一緒に手を携えて、仕事をしていきたいという提案をし続けていきたいと思っています。

感動的な企画、パリ展

今回パリで非常にいい展覧会が開催されます。みなさまのご尽力に対して高く敬意を表しますし、本当に感動的な企画だという風に思います。そういう意味で成功をお祈りしたいし、私としてもささやかながらできる範囲のお手伝いをさせていただきますという風に思っております。



アールブリュット・ジャポネ展第1回実行委員会の様子

輝く、舞う、生命の アートを見よ

毎日新聞論説委員

野沢和弘

顧問・実行委員・ オブザーバーの 皆様からのメッセージ

■アール・ブリュット・ジャポネ展 大ムーヴメントへの期待

日本財団 会長 笹川陽平

芸術の都パリで、日本の障害者がつくった優れた作品を世界に発信できることは画期的なことです。私たち日本財団と笹川日仏財団も、「パリ展」をしっかりと応援していきます。そして「パリ展」の先にある国内でのその後の展開についても、さまざまな形と新しい切り口を準備していきます。この出来事を誰かが知っている日本に。みんなで力を合わせて、本当のムーヴメントを巻き起こしていきましょう！

■アール・ブリュット・ジャポネ展に寄せて

元日本国政府代表大使 谷内正太郎

アール・ブリュット・ジャポネ展の作品群は、ものすごい衝撃があります。魂の叫びを感じます。私は美術をよくわかりませんが、ルーブル美術館も含め、権威のある美術館の作品を鑑て、「ああ綺麗だな」とか「すごいな」とは思います。しかし、今回出展される作品のように、ガーンと来るような衝撃力は感じられません。「アール・ブリュット」作家が生み出す作品の衝撃力は、やはり大衆なものだと思います。彼らの創作活動とそれらを発信する活動がこれからも大いに続けられ、世界に対してインパクトを与えていってほしいと思います。今回の展覧会を成功させるために、私を含めみなさんと協力したいと思っています。

■アール・ブリュット・ジャポネ展への期待

社会保険診療報酬支払基金理事長 中村秀一

アール・ブリュット・ジャポネ展に向けて、準備が進められている。スイスのローザンヌにあるアール・ブリュット・コレクションとわが国のボーダレス・アートミュージアムNO-MAが協力し、2008年に開催された「アール・ブリュット／交差する魂」展が国際的にも反響を呼び、パリの作品展開催に発展したことは、誠に喜ばしい。製作者たちの作品に接するとき、「障害の有る無し」を超えて訴える力に感動させられる。アートの分野だけでなく、すべての分野で障害を持つ人々が普通に活動し、参加できる社会を実現したいものだとの思いを強くする。

■この出来事を誰もが知っている日本に！

独立行政法人福祉医療機構 理事長 長野洋

第1回実行委員会での事務局の熱意に、私の心も上気したことを覚えています。その後も順調に準備が進んでいる様子何よりです。実行委員会顧問の大事な任務は「アール・ブリュット・ジャポネ展」についての広報活動であると心得て今日までの活動を披露させていただきます。まずは、身の回りからと、最初に当福祉医療機構の幹部職員向けの経営企画会議の席上、作品のCDを見ながらジャポネ展について説明しました。この模様は社内ネットを通して全職員に通知しています。次に当機構の機関誌「WAM10月号」にパリ展企画開催のご案内を掲載すると共に、長野が実行委員会の顧問に就任し展覧会の広報と障害者アートに関する普及啓発に努める旨の宣言をさせていただきます。WAM誌は、8,000部発行され、福祉施設、医療施設、厚労省、都道府県、金融機関などに配布されています。さらに発行部数16,000部を誇る「いきいきチャレンジ秋号」にも詳しい内容を掲載いたしました。配布先は基金助成先、都道府県、政令都市、市町村、地域の社協、NPO支援センター、福祉系学校、3500の全国の図書館など幅広く発信されておりますので全国に「この出来事」が伝わっていると思います。



■アール・ブリュット・ジャポネ展ニュースレターによせて

(株)損保ジャパン 顧問 損保ジャパン記念財団 専務理事 高宮洋一

アール・ブリュット・ジャポネ展の準備が、着々と進んでいる。芸術の都パリの、アル・サン・ピエール美術館に、日本を代表するアウトサイダーアーティストたちの作品がズラリと並び、パリの人たちに衝撃を与えることを想像すると本当に心が躍る感じがする。現地世界での大きな話題にもなるだろう。海外からの逆上陸の評価に刮目される事例の多い我が国の世評は、今回のこの取り組みに少なからず影響を受けることも想像に難くない。福祉助成財団の仕事にかかわり、各地の障害者の皆さんの生き活きとした生き方に日々触れていると、こうした皆さんたちがこの美術展のニュースに接し更にパワーアップするであろう状況が目に見え、嬉しさを感じる。ハンデのある人もない人も、あらゆる国民が「市民」として生き活きと生活する社会を築くことが私たちの目標であるが、今回のプロジェクトはその目標への大きなステップになると思う。関係者の多大な努力で、実現に向けて着々と進展しているエポックメイキングな本展が、大成功となることを確信し、来年春に向け大いに応援して行こうと思う。共に頑張りましょう。

人間とは絶えず外界にあるものを見たり聞いたり接触したりして、それを自分の中に取り入れ、いろいろな意味づけをして再び外に発している生き物ではないかと思います。自分の中にある記憶や感情の“海”の中に、出会った外界のものを沈めて発酵させて独自のものにしているのです。なぜかという理由はよくわかりません。まるで呼吸をするように、生まれたときから誰もが身につけている習性なのです。

言葉によるコミュニケーションをしない重度の障害者にとっても同じだと思います。彼らの表情や行動を注意して見ていると、感覚機能がはたらいて入ってくる情報にときめいたり、おそれたり、驚いたりしていることが伝わってきます。あるいはそうした感情のどれにも収まらない心の動きが彼らの中で起こり、微かな空気の振動を通して外界に伝わってくるようにも思えます。経済というシステムに浸りきっている私たちは何ごとにつけ財につながる合理性でものごとの価値を計る習慣が身に付いているので、そうした重度障害児者の心の動きに価値を見いだすことが苦手なのかもしれません。たまたま障害児を授かったり、障害児と接する職業に就いたりする人にそうした微かな心の動きをキャッチする感受性が生まれるというだけのことなのでしょう。絵や造形という表現形によって心の動きを伝えることの得意な障害者は、量的な評価にはなじまない世界の意味の深さを、特別な感受性を持たない人たちにも広く教えてくれているのだと思います。

障害児施設にボランティアとして集う大学生たちと親しくしていた時期が私にあります。どうして障害児に付き合うことで彼らが貴重な青春の時間を使うのだろうと不思議に思っていました。付き合いの度が深くなるにつれ、彼らが自らの親子関係や家族関係にどこか満たされないものを感じているのに気づくようになりました。原初的な人間のつながりに絶対性を持ってないことで、自分自身への肯定感や自分以外の人に対する信頼にどこか希薄な感じを抱いているようにも思いました。

自分の子どもに障害があることが分かって間もないころの親ほどデリケートで不安定な存在

■アール・ブリュット・ジャポネ展によせる期待

財団法人ダイトロン福祉財団 理事長 紺谷健治

2010年芸術の都パリにてアール・ブリュット・ジャポネ展が開催される。アール・ブリュット展は今までも各国で開催され絶賛を浴びている。この要因は「制作者側の論理で何事の制約も受けず、思いのまま自分の感情を作品にぶつける」ところに余人には計り知れない魅力を与えてくれ、制作者の心の叫びのようなものが強烈な迫力で伝わってくる所が、この展覧会の素晴らしい魅力ではないかと感じる。ましてや今回は芸術の本場であるパリでの開催となれば期待も倍加する次第である。特に今回は障害者の作品の展示となれば「生の芸術」そのものである。ぜひ多くの方々のご来場を期待する。

■大切にしたいもの

アールブリュット/交差する魂展 実行委員長 澤田史朗

今は時代の大きな変革期。このこと自体、否定する者はいない。豊かになって、人々の価値観が多様化し、これまでの支えていた社会の仕組みや制度が時代にあわなくなったから。けど、わかったような、わからないような。人間は、もともと、多様な生き物だ、と私は思う。これまではその多様性が発現されにくく、目に見えてこなかった。現在は、それを受容するだけの豊かな社会になったのだと思う。だからこそ、今、普遍的なものの目を向けたい。時代を超えて、洋の東西を超えて、人間として変わらないもの、体の中からわきあがる、押さえようのない衝動にかられ、生々しく、力強く表現されるもの。今こそ、本物と向かい合いたい。

■土の中の宝に魅せられて

株式会社朝日エル 取締役会長 岡山慶子

アール・ブリュット・ジャポネ展の主役は誰にも知られず自分のために絵を描き、ものを作る作家であることは言うまでもない。画家の野見山嶺治氏は「土中から掘り出でのアート」と表現している。その言葉を借りれば、土の中から掘り出された宝であり、それを掘り出した人たちもまたすごい。作品はそのところどころの土に含まれた滋養を吸収して作り出されたものである故に、美術の領域を超えて観る人に迫ってくる。日本人作家の展覧会がパリで開かれることに興味が尽きない。

■アール・ブリュット・ジャポネ展からの新たな始まり

日本精神科看護技術協会 会長 末安民生

長く精神科医療の現場では、治療の一環あるいはレクリエーション活動として創作活動が行なわれてきました。美術の専門家によって指導されたリ、作業療法、芸術療法として治療者や指導者の視線が交差しながらの作品の誕生でした。今回のアール・ブリュット・ジャポネ展にノミネートできている作家の作品はそれとは少し違っています。まなざしは本人のものにしっかりと固定し、紙という素材の中に埋もれている感情が、あたかも大理石から掘り出されたきて彫像が生命の宿りを感じさせるがごとくに紙上に飛び出しています。まぎれもなく作品は本人の感情がその方の運命を纏いながら、本人自身の手によって登場してきているのです。なかなか理解されずに時には紙屑であったものが命を与えられて、そこから作家に逆照射しています。その光は精神科病院にもそこに仕事に従事する私たち専門家といわれる集団にも光を射しています。その光によって今度は作家ではなく、私たちが自らに秘めた感情を解き放つことができるのか、そんなことが作品群から語りかけられているようです。我が国のこれまでの精神疾患、精神障がいへの誤解や思いこみ、そして偏見も照らし出しています。

※社団法人日本精神科看護技術協会では平成16年7月1日より障害者の表記を「障がい者」と改めております。

■アール・ブリュット・ジャポネ展への期待

厚生労働省 大臣官房参事官 蒲原基造

日本の新人作家達のアート作品が、ルーブル美術館をはじめ多くの美術館がひしめき合う「芸術の都」パリで展覧されようとしています。選ばれた作品の中には、「独走羅列」をコンセプトに昨年開催された「全国障害者芸術文化祭滋賀大会」で収集されたものも含まれています。国内において発掘された障害のある作家達の作品が、世界で美術的な価値を認められ、精神障害や知的障害のある作家達は、それを個性、才能として評価を受けました。彼らの作品により多くの人の目が向けられ、障害アートに対する国民の皆さんの関心がますます高まることを心から期待しています。

■アール・ブリュット・ジャポネ展への期待

文化庁文化庁芸術文化課長 清水明

私がアール・ブリュットの作品に出会ったのは、平成19年6月の文化庁主催による丸の内の子行幸地下ギャラリーにおけるアート展の開催がきっかけです。その後、池坊保子文部科学副大臣、岸宏一厚生労働副大臣の主宰による「障害者アート推進のための懇談会」の開催を通じ、作家の方や情熱的に活動を支えておられる方々と知り合うとともに、「アール・ブリュット／交差する魂」展などでエネルギー溢れる作品に驚かされてきました。今回の展覧会を契機に、圧倒的な力をもつ作品たちが、現代美術の世界、いや社会全体により大きなインパクトを与えることを期待しております。

■アール・ブリュットという自由と創造の翼に触れる

独立行政法人 産業技術総合研究所 人間福祉医学工学研究部門 井野秀一

長年、大学院で教育や人間支援技術の研究開発を生涯としてきた。このような場では予定調和的な定形は希である。「創造」「学際」「自由」を大切にし、ゼロから考え、何より「人」を深く知ることが大事である。翻って、「アール・ブリュット」という非定型な生の表現様式には、人間の無限の創造性と表現に対する自由な価値観が超然と作品に溶け込んでいると思えてならない。その証左に、作品群を眺めていると、いつのまにか忘れてしまった子どもの頃のとりとめのない世界がこころに湧き上がる不思議な感覚に囚われる。独創性が求められる研究者に関わらず、多様なものの見方を見失いがちな私たち大人が再び創造性の翼を広げるためにも、アール・ブリュットの世界を誰もが知っている社会にしたいと素朴に思う。

■アール・ブリュット・ジャポネ展に寄せて

NHKエデュケーションル 美術教養部 部長 田島徹

私は「新日曜美術館」という番組を担当していますが、いつも思うのが、「人間はどうして絵を描くのか」ということでした。子供から老人まで人が絵を描いている時の顔は、なぜかみんないい顔をしているように感じます。嬉しい顔も悩んでいる表情も、苦しそうな心の叫びも、どんな顔も皆、いまこの時を生きていることを感じさせてくれるのです。アール・ブリュットは、そのことを誇張するでもなく、素直にそのままに私たちに伝えてくれているような気がします。それだけに、「芸術」が「生きる」と直に結びつき、自然な気持ちにさせてくれるのです。この展覧会を通して、そんな日本のアール・ブリュットの芸術性の豊かさや人間の可能性、そして「人はなぜ描くのか」ということを、国境を超えてみんなが感じられれば、いいなあと思っています。成功をお祈り申し上げます。

■アール・ブリュット・ジャポネ展

ブロードバンドタワー 会長 大和田廣樹

アウトサイダーアートを初めて見たのは、2006年2月に行われたアメニティ・フォワードの時でした。それぞれの作品が持っている迫力に圧倒されアウトサイドアートという存在を知りました。その時にこれをもっと多くの人に見せたいという話があり、私も得意分野で何か出来ないかと考え、ネット上に美術館を作って国内外の人に作品を見てもらうのが良いのではと運営しました。その発案に賛同いただきまして今年ネット上の美術館が「SPIRIT ART MUSEUM」が出来ました。(http://www.spiritartmuseum.jp/)そして、今回、パリでアールブリュット・ジャポネ展が開かれ海外でさらに多くの人に見ていただけることは、とても嬉しいことです。これをきっかけにアウトサイドアートがメジャーになればなと思っています。

■パリ展に向けて……

株式会社シグロ 代表取締役 社長 山上徹二郎

知的障害者のアート作品が世界的に注目されるようになってきていることは、とてもいいことだと思います。従来の芸術分野にこだわることなく、福祉と美術のボーダーを取り払って、新しいジャンルとしてのアートシーンが生まれることを期待しています。「福祉」という概念の中には広く美術も含まれる」と思っていますので、そのような発想の転換を積極的に進め、社会にアピールしていく必要があります。表現をする「已むに己まれぬ衝動」が、それ自体としてアートであるという捉え方が大事であり、それは「生きたい」という根源的で内的な衝動と同義であると思うからです。

■ジャポネ展 ～新しい文化交流の大きな一歩として～

株式会社シュア 代表取締役 齊藤睦子

アール・ブリュットと呼ばれる作品群を初めて目にしたとき、今までは漠然と自身で感じていたはずのアートという枠に入りきれない、体の奥から何だか「もぞもぞ」とするような感情が湧き起こりました。造りたいから造り続けるという、シンプルに湧き上がるアール・ブリュットのな放流の形を、今回のジャポネ展開催を通して、多くの方々に体感していただきたい。私が、「もぞもぞ」と感じた不思議な感情や、言葉では収めにくい感想を多くの方々と共感して、人が何かを創造するということとはどんなことなのかを正面から考えてみたい。そんな風にワクワクしながら実行委員としてお手伝いできればと考えています。

■パリ展がもたらすもの

NPO法人ラボラボラ 代表 工藤和彦

日本の作品群がパリで展示されるのは、本当にしみない出来事である。特に私たちのような地方にあるNPO法人にとって、人知れないところで制作されたアウトサイダー・アートを発掘し、調査し、それが他の美術関係者の評価に繋がり、ついにパリの美術館で展示されるのであるから、痛快としか言いようのない爽快感がある。また、作家やその家族との付き合いなども深くなっていることから感慨深いものである。今後、海外からの熱い視線を得て、これまで以上に日本全土が新たなアウトサイダー・アートの発掘にヒートアップしていくことだろう。

■「ジャポネ展」の予感

いわて・きららアート協会事務局長 三井信義

岩手の人 沈深牛の如し…
地を往きて走らず 企てて草草ならず
つひにその成すべきを成す…

花巻に疎開していた彫刻家・高村光太郎の「岩手の人」という詩の一節である。岩手の人間は、草やかさには欠けるが、黙々とそしてこつこつと取り組み、いつしかその成すべきを成す…というタイプが多い。この度のジャポネ展に岩手からなんと9名もの作家が選ばれた。すごいことである。また今年はアジア・パラアート展に2名が入選、岩手県芸術祭現代美術部門で第二席に当たる優秀賞を受賞するなど目覚しい活躍である。岩手で障がいのある方々のアート活動を支援する「いわて・きららアート協会」がスタートしたのが13年前。岩手の大地にこつこつと蒔いてきた種が、少しづつ芽を出しつばみを膨らませてきたかな…と手応えを感じている。いつしか沢山の花を咲かせてくれることを予感させる「ジャポネ展」である。さぁ！みんなでパリに行こう！！

■ジャポネ展＝実行委員からの応援メッセージ

アートキャンプ2001実行委員会 朝妻彰

沖縄から5名の作家が招待されることになった。マスコミ等を活用して、「顔」巡回展、SAMと併せて、地元で広くアピールしていきたい。また、九州地区や全国規模の障がい者の研究集会が今年から来年にかけて沖縄で開催されるので、その場でも「この出来事」の意義を伝えていこうと準備を進めている。ここ数年の国内外における日本のアウトサイダーアートの紹介、そして今回の「ジャポネ展」は、アートの世界だけでなく、日本における障がい者観を変えるインパクトを秘めている。

はないのではないかと思います。自らの運命を呪ってみたり、やり場のない怒りに自分の心を焦がしてみたり、しかし時には見返りを求めない純度の高い愛情を障害のある子に注ぎ尽くしたり……。無防備な姿をさらけ出して親子の存在証明を探し回っている姿を間近に見て、ボランティアとして自らも親子の人生の瞬間に関与することで、大学生たちが親子関係を疑似体験して、自らの満たされなさを修復しているのではないかと思ったものでした。

しかし、それは本当にそうなのでしょうか。太陽の光が木々の葉を透かして揺れ、水しぶきがキラキラと散るのを見ているときの自閉症の人の幸福感に満ちた表情には、そんな人間の関係性のありようを寄せ付けない圧倒的な感性を見せつけられるようにも思います。生きているということ自体の幸福をどうして私たちは感じるができなくなったのでしょうか。障害のある子自身が何か発しているものが大学生たちの傷つきやすい心に化学薬品を注ぎ込むようにして刺激し、生きることへの感性を引き出しているのではないか、というのは荒唐無稽な考えでしょうか。

<inspire＝精神を吹き込む、鼓舞する>。重い知的障害の子と接していると、そんな言葉が脳裏に浮かびます。障害のあるアーティストの重厚で大胆な構図の作品を見つめていると、生きている実感のようなものが細胞を躍動させるのを感じたりすることがあります。障害のある人の誰もが芸術的才能を見せるわけではありません。むしろ、確率的にはそうした表現形を示すことができる人は極めて少数なのかもしれません。しかし、風の感触に微笑み、ひらひらと風に舞う自閉症の人を見ていると、彼らの内なる感情の動きを障害のあるアーティストの作品に重ね合わせてみたくなります。

いったいパリの人々に彼らの作品はどう受け止められるのでしょうか。言葉という壁がもともとと存在しないだけに、もっと直接的にパリの人々の感性を刺激するののかもしれません。日本の障害者の作品がパリの人々をどのように<inspire>するのか楽しみです。

■パリでの展覧会に期待すること

滋賀県市長会会長 目片信 滋賀県町村会会長 北村又郎

この度、我が国の障害者の制作する作品がパリ市立美術館主催の展覧会へ招待されるとのこと、大変嬉しく思っております。滋賀県では、1946年(昭和21年)に全国に先駆けて創設された障害児施設「近江学園」での自由造形活動に端を発し、現在に至るまで、障害者の社会参加・共生社会の実現を目指し、障害者の造形活動の推進に取り組んでおります。パリへ招待される64名の作家のうち18名が滋賀県の作家であると同いいましたが、このような我が県の歴史と無関係ではないと思います。この度のパリでの展覧会が、共生社会の実現に向けたさらなる契機となりますことを大いに期待いたします。

■アール・ブリュット・ジャポネ展

日本精神科病院協会滋賀支部 支部長 細下嘉之

精神科医として長年様々な療法にも関わってまいりました。絵画もその一つでしたが、あくまで治療の一環で、感情・記憶・イメージ等を本人と共に解釈したり共有するものでした。ですが、それらの作品群に何か不思議な力を感じることもあったのです。世間の人は精神障害にたいし、不安や恐れを持っているように思います。このような展覧会が新たな認識をもってもらうチャンスであり、また障害を持つ人が社会との関係を保つ良い機会になると思います。「この出来事を誰もが知っている日本に！」少しでもお役に立てればと願います。

■心の表現、表出を世界の人々に

滋賀県社会福祉協議会 会長 嶋川尚

土掘りから土練り、成型、ろくろ、型押し、素焼き、絵付け、本焼きや楽焼き、さらに販売と様々な作業工程が含まれる「窯業」が訓練科目として、昭和23(1948)年6月近江学園で始まりました。当初は、生産から販売を目指しましたが、その過程で、小さな子どもや知的障害児が粘土細工に興味を持って固唾をのんで見守る光景が出現しました。障害を持つ子どもたちは、自分の思い思いの粘土細工をする中で、様々な造形物を作り焼き物として作業場の片隅に置き始めたのが、今日になり芸術的作品として評価されるようになりました。彼らの心の表現、表出が世界の人々に、芸術作品として展覧されることを心からうれしく思います。

■アール・ブリュット・ジャポネ展」に寄せる期待

滋賀県手をつなぐ育成会 会長 久保厚子

障がいのある人たちの創作活動は、発達と教育の観点から各地で実践され、その作品は感動と驚嘆の世界へ導いてくれます。そして今、ボードレス・アートとして日本のアーティストの作品が反響を呼び世界を駆け巡っています。今回のパリ市における「アール・ブリュット・ジャポネ展」も私たちの期待を超える成果をあげる事と思います。育成会としても是非多くの方々にこの出来事を知っていただきたく、滋賀で行う全国大会等を始め、その周知に努力したいと思っています。皆でパリ展を見に行きましょう！！

■アール・ブリュット・ジャポネ展に寄せる期待

鳩の会(NPO滋賀県精神障害者家族会連合会)理事長 川並正幸

恥ずかしながら私は「障害者アート」なる言葉を知りませんでした。しかもその作品が世界でも高い評価を得ていることを。精神障害者がその回復のためのリハビリテーションとして絵を描いたり、工作、手芸品を作ったりしていることは知っていました。しかし、それは「それだけのもの」と思っていました。今回作品を見させていただき、繊細なもの、激しいものなどいろいろありますが、正直私には正しく評価はできません。しかし、「アール・ブリュット・ジャポネ展」で海外の高い評価が日本に伝わり、日本のマスメディアに載り「障害者もすばらしい能力があるのだ」と言う社会的評価を得て(今でも得ているが)それが偏見や差別の解消につながることを期待します。

■芸術の都「パリ」

滋賀県児童成人福祉施設協議会 会長 橋本浩明

誰しもが知っている芸術の都パリ。2010年3月にパリ市立美術館で「日本の障害者アート展覧会」が開催予定で、現在その準備が進められております。この話しを聞いたときには、私たち施設関係者でなくとも「ホンマかいな?」と驚かれたことと思います。福祉関係での造形活動の歴史は、一般的に考えるとまだまだ浅いと思うところです。辞書によると芸術とは、あらゆる手段を駆使して美を創造・表現しようとする人間活動とあります。日々の活動で芸術療法とともに芸術活動として続けてこられたことが障害がある無しに係わらず「作品」そのものの評価が認められこと、全国いろいろな所で「芸術作品」として発掘されたことなどが、今回のパリ展開催に繋がったものと思います。芸術の都「パリ」での展覧会、本当に楽しみであります。

■発掘された花たち

ボードレス・アートミュージアムNO-MAアートディレクター はたよしこ

日本のアウトサイダーアートの本格的な発見、発掘は、1990年代半頃から始まった。しかし今まで海外で紹介された作品は、そのほんの一部に過ぎない。欧米に比べアジアの作品は未だその全容を表さないが、そこに人間が生きている限りそういう表現は普遍的に存在するのだ。無言の花のように。この度のパリ展では、我々が把握する100名ほどの日本の優れた作り手の中から、65名が主催者側の館長によって選ばれたが、いずれも感度の鋭い選択だと納得した。ローザンヌでの「JAPON」展(2008)以後、ヨーロッパにおける日本のアウトサイダーアートへの注目が大変高まっている最中、パリでのこの大規模展はおおきな意味をもつだろう。今後の展開を見届けるまで、私もまだまだ頑張らなければ……！！

アールブリュットジャポネ展に寄せて 「後見人奮闘記」 弁護士 川島志保

いつだったろう、パリに行くという話を聞いたのは、正直言って、私は、パリにもフランスにも、イタリアにも、ドイツにも行ったことがない。ヨーロッパは、遠い国である。フランスと聞くと、つい、若い頃口ずさんだ萩原朔太郎の詩(旅情)を思い出す。

パリの話は、著作権について、全国を飛び回りその考え方を伝えている最中に来た。

障がいのある人の美術作品を美術展に出展するには、図録を作成するには、あるいは、絵葉書やノート等を作るには、これまではだいたい家族に確認してきたのだけれど、それでいいのかと聞かれたとき、法律家の私は、卒倒しそうになった。法律的に言うと、そういうことは、その作品を作った作者(著作者)自身が決めることであって、「家族」が決めることなどあり得ないし、それは、著作権の問題であり、かつ、知的障がいのある人の場合、本人に契約締結能力があるか否かという問題なのである。

しかし、恥ずかしながら、著作権は、これまで私が関わることのなかった分野である。知ったかぶるわけにもいかず、老骨にむち打って調べてみると、著作権の世界は奥が深かった。著作権という権利の束の中には、財産権としての著作権と人格権としての著作者人格権があるという。そして、著作者人格権は、その人だけのもの(一身専属権)で、誰にも譲ることができないのである。

アール・ブリュット(Art Brut)とは、生の、ビュアな芸術という意味である。ひとつひとつ丹念に描かれた文字、人、電車やバス、細部にまで拘った町並や家の記憶、思いのままに造形され彩色された絵、絵、土から生まれた不思議な陶芸作品、思いもよらない材料から生まれた奇抜な作品等々が、私たちの心を打つのは、それらはみな、作者の魂のほとばしりであり、叫びだからである。まさに、魂の芸術である。

福祉の世界は、「個」が曖昧である。障がいのある人はひとりでは作品が作れない、みんなの支えてできた作品だと、本人を取り巻く「優しい仲間達」がそこにはいる。しかし、周囲の人が励まして、絵の具を用意しても、彼がいなければ作品は生まれない。だから、障がいがあるとなかろうと、作品は作った人のものである。

彼等をひとりの芸術家として、「個」として捉えれば、その作品を展示したいという美術館の契約の相手方は、作家本人である。知的障がいがあるため、契約の内容が十分に理解できないならば、法律の定めにしたがって後見人を選任し、後見人が彼等に代わって契約を結ぶという手続きを取ってこそ、彼等の「個」は尊重される。

その後、私は、美術展への出展等の契約のために、後見人選任が必要な人たちへの説明の旅(後見人行脚)に出かけた。作家とご家族、彼等を支える施設の職員や学校の先生等々、たくさんの人たちとの出会いがあった。私が、「後見人」、「家庭裁判所」、「財産目録」等々の言葉を発する度に、そんな難しいこと言わなくてもいいのではないかと、顔を

しかめる面々を前に、私は熱弁を振るい続けた。

私はだんだん気づいていった。曖昧なのは、福祉の世界だけではなく、日本国民全体かも知れない。法律という特殊な世界にいる私の方が、エイリアンかも知れないと……。そんなある時言われた。「川島さん、パリの美術館から展覧会の申し入れがあったんだけど、出展契約を確実なものにしたいって言われてるんだよね。やっぱり後見人が必要？」もちろんである。海外は権利関係がはっきりしている。契約の内容が十分に理解できない作家には、後見人の選任が必要だ。このように答えた。この後、変化は起こった。「川島さん、パリ展に行くのに後見人が必要とはっきりしたら、これを機に後見人選任の手続きをしようっていう作家が増えたよ」

作家にとって、ご家族にとって、施設職員にとって、法律の話よりインパクトのあったのはパリ展だった。今までも施設や団体主催の展覧会も多く経験してきているだろうし、それなりの評価を得てきたという作家も少なくないだろう。しかし、芸術の都パリでの展覧会は、改めて彼等の作る作品が一流の芸術作品であるということに気づかせてくれ、今まで以上に、彼等をひとりの芸術家として、「個」として捉えるきっかけになったのではないか。このように感じたから、後見人選任の話も納得出来たのではないか。後見人行脚の旅で出会ったある作家の誇らしそうな笑顔が、私は、忘れられない。「川島さん、僕の絵が、パリに行くんだ」とうれしそうに語る彼は、ひとりの芸術家だ。まっすぐ前を向いて、顔が輝いていた。

よし、パリに行くなら、美術館出展等の契約が必要だ。後見人を選んで、みんなでパリに行こう。今や、著作権法の勉強も極め、専門家だと自称(ほんとに自称しているだけです)している私だが、いまだに「後見人」、「家庭裁判所」、「財産目録」と叫び続けている。最後には必ず、「パリ展に行くならね」と付け加えながら。

最初に引用した詩です。おまけです。

「旅情」(萩原朔太郎「純情小曲集」より)
フランスに行きたしと思えども
フランスはあまりに遠し
せめては新しき背廣をきて
気ままなる旅にいでてみん

汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおぼはむ
五月の朝のしのめ
うら若草のもえいつる心まかせに。

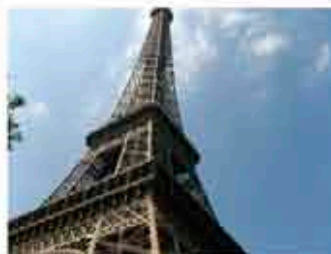
ART BRUT アール・ブリュット・ジャポネ展 JAPONAIS

鑑賞ツアー参加者を募集しています パリ7日間の旅 2010年3月19日—3月25日

かのパブロ・ピカソやアメデオ・モディリアーニなどもアトリエを構え制作に没頭したといわれるモンマルトルの丘……。この麓に位置するアル・サン・ピエール美術館(HALL SAINT PIERRE)で開かれる「アール・ブリュット・ジャポネ展」のオープンに合わせて鑑賞ツアーの参加者を募集しています。オープニング式典への参加はもちろんベルサイユ宮殿の観光やパリ市内の精神科病院の見学など、オプションツアーも盛りだくさんです。パリ市立美術館主催による日本人作家約60人の大規模展覧会。

オープニングに参加新しい日本文化が発信される瞬間に是非お立ちください。

詳しくは、別紙ツアーパンフレットをご参照ください。ツアーパンフレットのご請求は事務局まで。



パリ市立アル・サン・ピエール美術館

アール・ブリュット・ジャポネ展 主催/会場 パリ市立アル・サン・ピエール(HALL SAINT PIERRE)美術館
【後援】(予定) 在日フランス大使館、在フランス日本大使館 【助成】日本財団 財団法人 ダイトロン福祉財団 【協賛】笹川日仏財団

【日本事務局】滋賀県社会福祉事業団 企画事業部(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA) 担当(田端、齋藤)
所在:〒523-0893 滋賀県近江八幡市桜宮町235 電話:0748-31-2481 FAX: 0748-31-2482 E-mail:art-brut@sisyazi.jp

アール・ブリュット・ジャポネ展 ニュースレター 2009年12月発行
編集/発行 滋賀県社会福祉事業団 写真:大西暢夫、高石巧 デザイン:高石巧